へ、燭を石上などに置て禮して退く、客其燭を取て庭の木立など見るふりして、わざとなく主の歸る道を照らすなどやうの心づかひ、禮の實に愜ひて此意をめぐらさば陰陽成べし、さるに俗流の弊風、得がたきをもとめ、金錢を費し、あるはまた其産業ならぬ人も、黠智あれば是をもて利を射るにも及び、心ざまよからず成行もまゝみゆ、富豪の家に茶を翫ぶことを禁ずるがあるも、子孫過奢に及んことを懼るゝと也、利休のことばとかや、釜ひとつもてば茶湯はなるものをよろずの道具好むはかなさ、釜なくば鍋湯なりともすき給へそれこそ茶湯日本一なれ、かくいへば有道具をもおしかくしなきまねをする人もはかなき、○中略

一人茶を翫びて、苦むしたる石の盥水盤を愛し、今參の男に水かへさせけるが、彼苦を殘りなく洗ひ捨つるにおどろきて、かくはするものかとむづかりしにこたへて、さきに見侍れば、蚯蚓蜒蚰蝸牛やうの虫、苦をよすがに宿りしかば、口をも嗽ぎ給ふものをと思ひて、能清め侍りしといふ、あるじこゝにして思惟すらく、彼がいふはことわりにして、吾古びを好むは僻めりと、これより古器の潔よからぬをさとりて、つひに茶事を廢せり、

〔花月草紙四〕やんごとなき人ありけり、茶たつることをこのみて、かの宗易が流をくみて、かれがもたるうつはなどおほくとりあつめ、宗佐よりいまの代々のつくらせたる什器やうのものまでも、かくることなくそなへしなど、みづからおひ給ひてけり、ある時宗易が像をかべにかけて、かくたうとびぬるは、われにまさるものやあらんなど、かたはらのものにもあさ〳〵しくいひて、茶ひきて居給ひしが、かの像より、煙のごときりのたつやうにみえしが、宗易來りて、われはもとよりいやしきものなるが、物にかゝはらず、心だかき氣象ありければ、太閤○豐臣秀吉のとり用ひ給ひてけり、茶たつる事は一時の心やりにて、なしてもありなん、なさでもあるべきものなれど、そのころいともてあそび草となりて、さま〳〵心にまかせ、つゐには法もなく禮もなく、みだ